

## 茨木高校野球部

## OB会報

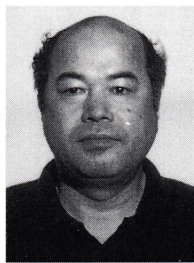
発行

大阪府立茨木高校

野球部OB会

## かけがえのない

## 野球部生活

泉 勇策  
(高18回)

私が茨高野球部の門をたたいたのは昭和三十八年の四月でした。中学の親友だった軟式テニス部の藤田君と一緒に部室へ行ったのを昨日のように思い出します。藤田君は当然のように硬式テニス部に入学したけれど私は「絶対に高校野球をやりたい」という熱い思いで、いっぱいでした。ただ野球が好きだというだけで何の不安も心配もせず部室に入った自分の気持ちに今でも「あれが俺の青春の始まり」と実感します。それから二年後の昭和四十七年七月の夏の大会まで長い(五十になった私の年令からいえば、わずかに二年ではあるのですが)茨高の野球部生活が始ま

りました。

私にとっては茨高生でなくて茨高野球部生となったのです。私が入学したのは入学して一週間もたっていないかっと思いましたが、すでに吉田君を始め、数人の一年生が入っていて、結局最後まで野球を続けたのはこの時の吉田、倉持、前田、宮武、木村、泉の六人ではなかったかと思えます。

捕手として期待された徳永君は膝を痛めたため、マネージャーとして力を尽くしてくれました。その日の内に、主将の島さんにグラウンドに案内してもらって見学した時、吉田君の体格とプレーを見て「あれでも一年生やろか、凄いい奴がいるなあ」と驚いたのを憶えています。

一年生の時で一番嬉しかったのは始めて公式戦に出場した秋の大会の一回戦。相手は西野田工業高校で、会場は北陽高校のグラウンド。主審は北陽高校の松岡監督でした。二打席目だったと思いますが、ノアウト一塁でヒットエンドランのサインが出て初ヒットを打てたことです。この試合では、デッドボールを松岡主審に「わざと足を出したからダメ」と認められなかったり、外野でトンネルをしたり、

ライト前のヒットで三塁に向かって走者をアウトにできたりで思いに残る試合となっていました。

逆につらかったのは、何といても最後の夏の大会。それなりに期待され、私もクジ運に恵まれれば、うまくいけばベスト16とか、公立では最後まで残れるんじゃないかと考えていたのが何と一回戦のノーヒットノーラン負け。前々回に登場した吉田君が反省として「甲子園をめざすという点で我々の志は低くなかったか?」と問いかけてくれたが、私は思わず唖ってしまいました。「あれだけの練習をしたのに」と。しかし、本番に力が出せなかったことから考えてそれは精神的な面でも、練習方法や日常生活の面でも、「甲子園に出るんだ」という志のレベルからすれば不十分な点は確かに多かったですと反省するばかりです。相手の太成高校の牛屋投手のコーナー一杯に投げかけるカーブやシュートに私は全くついていけず4打席4三振の屈辱的な結果で、たまたまた太成の二塁手は小学校の野球仲間だ(こっちは打ってこんか!)とさんざんヤジられたのが耳に残っています。

とにかくそのショックは余りに大きく「とても茨木の町は歩けない」と田中監督と一緒に私の尼崎の家に引きこもり、競艇に行ったりボート映画をみたりで、漠然自失の状態が続きました。しかし、この悔しさがバネになって受験競争では全員が国立校に入学できた事は野球部で培った精神力と集中力の賜といっても過言ではないと

思います。

特に私は授業が好きな方ではなく、欠席はないけれども欠課時数が一年生の時に六十時間。学校のグラウンドが工事で使えなかった時にお世話になった社会人の軟式の試合の主審をノーマスクで行ない、二度のファールボールを受け、保健室とグラウンドの往復の多かった二年生の時は百時間を越えてしまいう状態だっただけに皆も驚いたようです。スポーツと勉強の両立が、希望の大学入学で証明されることは考えません。そうでない方が多いでしょう。

しかし、何も考えずに、やりたいう事をいろんな苦しさ乗り越えて集中し続けるしこれも最も成長する高校時代にしてこれ何物にも替えられない財産だと思います。福留先生には仲人までお願いし、田中先輩とは未だにバッテリーを組み、吉田君やストリートにはめっぽう強いがカーブにキリキリ舞いの倉持君を始め、何でも話せる友もいる。

私の人生は、茨木高校野球部をぬきにしては語れません。田中先生の提案されたエンドレスの大OB戦が是非実現されますよう願っております。

## 部長より

責任教諭 中井 仁



茨木高校硬式野球部OBの皆様、昨シーズンは、力強いご声援、ご支持いただき、誠にありがとうございます。昨年は、ようやく3学年そろったチーム構成となり、練習内容にも幅がで、少しずつではあります着実に力を付けてきたと、選手諸君を高く評価しています。

選手紹介にありますが、2、3年の19人に加えて、1年からは16名の新入部員を迎え、選手33人、マネージャー2名の陣容で今季に臨みます。昨年同様、監督、コーチには、高47回の松枝洋氏と赤井浩輔氏にお願いしています。5年間、校内のグラウンドが使えないという悪条件を乗り越えて、ここまで野球部が、クラブとして成長できたのは、OBの方々の伝統と、お二人のすぐれた指導のたまものと、感謝しています。

4月末には校内グラウンドの整備が完了し、放課後には生徒たちの声がグラウンドに響いています。やはり、見ていて清々しいものです。OBの方々の残してこられた立派な実績のおかげで、新グラウンドには立派なバックネットやバッテリーズ・マウンドも作っていただきました。すでに、ベイス金具も埋め込み、本格的な使用に入っています。他校と同じ、あるいはそれ以上の条件が整ったところで、部員一同がどこまでがんばれるか、結果を出し得るか、今年度の活躍に期待がかかります。皆様には、一層のご支援、ご鞭撻をお願いいたします。